



TITLE:

表在性膀胱腫瘍に対するレンサ球菌製剤, OK-432による局所療法およびOK-432と腫瘍との共通抗原性

AUTHOR(S):

藤岡, 知昭; 白石, 正彦; 丹治, 進; 小池, 博之; 鈴木, 薫;
熊谷, 幸三; 青木, 光; ... 久保, 隆; 安達, 雅史; 後藤, 康
文

CITATION:

藤岡, 知昭 ...[et al]. 表在性膀胱腫瘍に対するレンサ球菌製剤, OK-432による局所療法およびOK-432と腫瘍との共通抗原性. 泌尿器科紀要 1989, 35(2): 253-257

ISSUE DATE:

1989-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/116439>

RIGHT:

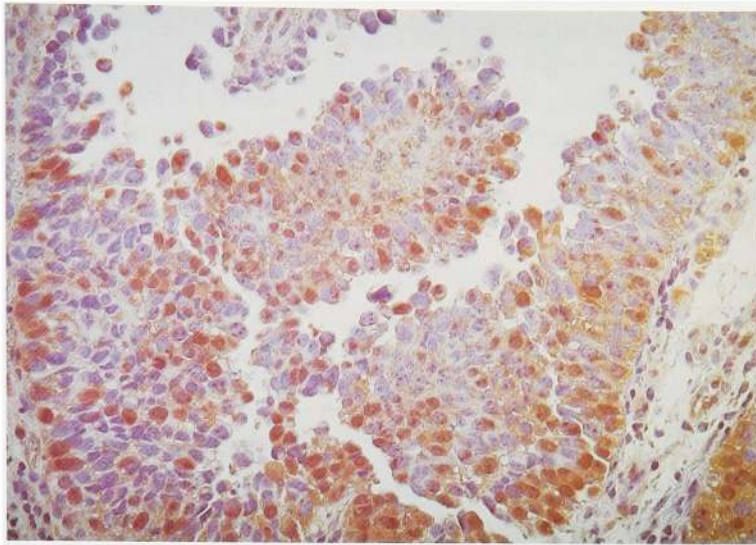


Fig. 1. A photomicrograph of biopsy specimen before OK-432 therapy shows tumor cells stained to be red-brown by the PAP method using anti-OK-432 serum as the 1st antibody.

は有効例であった。一方、膀胱有効例6例中この抗原陽性例は4例(66.7%)である反面、不変例22例中OK-432抗原陽性例は9.1%(2例)であった。またOK-432局注施行10例中、4例で抗OK-432抗原の存在を認め、うち3例(75.0%)は有効例であった。この有効3例中2例(66.7%)においてはOK-432抗原陽性である反面、不変例7例では14.3%でこの抗原陽性であった(Table 3)。

3. OK-432局所療法の副作用

今回の症例において、頻尿および排尿痛などの膀胱刺激症状を訴えた例はなかった。また腫瘍内局注例の2例(20.0%)で38°C以上の発熱をみたが、いずれも一時的なもので鎮痛解熱剤の投与により対処できた。その他、OK-432局所投与前後において、血液一般、血清、腎機能および肝機能の検査値上いずれも著明な変化は認めなかった。

考 察

泌尿器科領域、特に膀胱腫瘍に対するOK-432の使用経験に関する報告は、今日、すでに表在性膀胱癌の治療および再発防止の重要な手段として広く用いられているBCGの膀胱内注入療法と比較し、極めて少なくその評価も一定しない。すなわち膀胱癌に対するOK-432局注および膀胱注の有効率は諸家によりまちまちで14.3%より25.0%と報告されており^{5,6)}、BCG膀胱療法における有効率、すなわち上皮内癌以

Table 2. Results of local immunotherapy with OK-432 in superficial bladder tumors

	Complete Responders/Total No. of Pts.(%)	
	Intravesical instillation	Intratumor injection
Stage		
Ta	5/14 (35.7%)	2/8 (25.0%)
T1	1/14 (7.1%)	1/2 (50.0%)
Grade		
I	6/12 (50.0%)	3/3 (100%)
II	0/12 (0%)	0/7 (0%)
III	0/4 (0%)	—

Table 3. Relationship between antitumor effects of local treatment with OK-432 and common antigens and the bladder tumors

	with antigens	without antigens
(Intravesical instillation)		
Complete response (n=6)	4 (66.7%)	2 (33.3%)
No change (n=22)	2 (9.1%)	20 (90.9%)
(total)	6	22
(Intratumor injection)		
Complete response (n=3)	2 (66.7%)	1 (33.3%)
No change (n=7)	1 (14.3%)	6 (85.7%)
(total)	3	7

外の表在性腫瘍で30~70%の症例で腫瘍消失が得られたとする報告⁷⁻¹²⁾と比較して必ずしも満足できるものではなく、OK-432による治療効果は限られたもの

